

ファッシズムと市民社会、大衆社会

北島 平一郎

目次

- 一 ファッシズムと全体主義
全体主義の意味
資本主義体制の変革とファッシズム
大衆社会の出現とファッシズム
- 二 ファッシズムと大衆社会
市民社会と大衆社会
大衆社会と自由、平等
デモクラシーの挫折
ワイマール共和国におけるデモクラシー
労働運動の敗退
- 三 ファッシスト心情
大衆社会の不安と憔悴
大衆社会の星雲的欲望と深層革命心理
第一次世界大戦と市民社会の崩壊
大衆社会のファッシスト心理

四 ファッシズムの勃興

ファッシスト軍団

ファッシストと市民社会の理念

ファッシズムと偶像

ファッシズムと民族、歴史、伝統

五 むすび

一 ファッシズムと全体主義

全体主義の意味

ファッシズムは、全体主義 (totalitarianism) の一形態と言われる。全体主義とは社会全体を掌握して、その安定と秩序を考えるものであり、一階級の利害を全体社会の上に置く政治体制とは異なる。⁽¹⁾しかしこの全体主義の支配する社会においては、社会の原子化 (atomization)、個別化 (individualization) が進み、そこにおいてはすでに階級社会が崩壊しているという現象がある。個人の自己中心主義が蔓延し、これが結局は個人の自衛本能を弱め、更に危険な扇動的な宣伝の餌食となる。こうしてこの社会の個人は、社会のすべての階級の有していたイデオロギーや、示唆といった不明確な観念のつめこみによって支配されるのである。このため、この社会においては大衆は共通の利害の中や、政党、市政府、専門組織、労働組合等には、右の意味からして組織されることはない。⁽²⁾以下に、全体主義社会の特徴を要約する。

(1) この社会のイデオロギーは次の如くなる。この社会に住む各人が満足する人間の存在にかかわる公的な一体の

觀念から構成される考え抜かれたそれ。このイデオロギーは、個性的に人間の完璧な最終状態を想定している。即ち新しい社会をもって主にそれを止揚する現存社会への過激な反対概念、即ちキリストの千年統治觀念 (Chiliasm) をさえ含むそれである。

(2) 一人の独裁者に率いられ、中核として人口の一割に満たない男女黨員から構成される単一の大衆政党。この中核は、イデオロギーに全身、全霊をもって奉仕し、そのイデオロギーが社会に浸透するよう運動する。従ってこの党は、全体的、独裁的に組織され、典型的に政府官僚主義に上位すると共にこれとからみあっている。

(3) 精神的、肉体的な恐怖の組織。党と秘密警察が、その指導層のために党を支え、監督することを通じて効果を發揮するそれ。それが独特に党の明確な敵のみならず、多少とも独自に選ばれた民衆の諸階級を統制する。秘密警察にしる、党指揮の社会的圧迫にしる、こういった恐怖が近代科学とそしてとりわけ、科学的心理を蚕食する。

(4) 技術的にほとんど完璧な、党と政府の手による大衆コミュニケーションの効果的な全手段、即ち新聞、ラジオ、映像、映画の独占的統制。

(5) 同様に、技術的にほとんど完璧な武闘のための全武器の効果的な使用統制。

(6) 以前は独立の存在であった法人組織と、典型的に政府関係以外の組織やグループの官僚的調整を通じて行う全経済の中央的統制、指揮。⁽³⁾

全体主義としてのファッショニズムの特徴が、右の如きものであるとして、これを支える大衆の意識は如何なるものかを次に考えてみる。

資本主義体制の変革とファッショニズム

ファッシズムを生み出す社会的背景としては、社会の経済組織における変革の問題、大衆社会の成立の問題、それに引きずられる政治組織の変革の問題等が考えられる。まず経済組織の問題があるけれども、産業社会の成立にともない、世界的にその産業成熟の度合いが異なる問題が起ってくる。この場合後進資本主義国が、産業革命を起して先進資本主義国に追いつくというプロセスが当然あるけれども、これだけであると問題は程度のそれ、発展過程の競争のそれとなって質的变化、質的異同の問題は起らない。

しかしこの迫いつき、追いつき競争のみでないと社会的変革の重大問題がある。そして資本主義の後進性の悩みから、これを改良するための試みが、資本主義そのものを原則的に否認する運動へ発展する。これが一九一七年のロシアにおけるボルシェビキ革命となったことは、ここに喋々するまでもない。こうした社会経済組織の変革の問題としてファッシズムが生起するということも否定できない。こうなるとファッシズムは後進資本主義国が、高度資本主義国に転換するために起ると言える。しかしそればかりではない。即ち、後進資本主義国ではなくても、何かの原因を受けての経済の建直しのための社会経済体制の変革というものが問題となってファッシズムが生起する場合も大いにあり得る。イタリア・ファッシズム、ドイツ・ナチズムは、まさにその典型であるといえる。⁽⁴⁾

ナチスは、四カ年計画をもって資本主義を修正するべく、社会経済組織の建直しをはかった。ムッソリーニは、組合国家(大阪経済法科大学法学紀要第九号論文(一九八八年七月)、拙稿、ファッシズムの源流とボナパルチズム、一七頁参照、以後「紀要九号」として引用)を造成してイタリア社会経済の建直しを試みた。すべてレセ・フェール(Laissez-faire)レセ・パセ(Laissez-passer)という自由主義経済組織に対する反対概念である。⁽⁵⁾ その意味では、レーニンのネツプ(New Economic Policy)スターリンの経済五カ年計画と何ら選ぶところはない。ただ前者は社会の全階

層を是々非々に包含する全体主義国家であることをたてまえとし、また綱領としたが、⁽⁶⁾ 後者は、労農階級優越国家をたてまえとした点が異なっている。なお一種の社会経済の発展段階説として、ファシズムは、後進資本主義国がおくれた産業化 (delayed industrialization) を推進するためにとられる政治社会経済体制であるとする議論もある。

大衆社会の出現とファシズム

ファシズムは、その二番目の段階に生起するという社会経済発展段階説は次の如くである。源初的統一 (primitive unification)、これは民族主義国家の生成と統一のそれで、第一段階である。第二段階として産業化 (industrialization) のそれ。ここにおいてはマス社会 (masses society) が出現している。それまでは支配的政治社会経済体制から疎外されていた大衆がそれらに参画する体制がとられ、民族国家の中へ彼等が包摂せられる。政治の多様化、経済的近代化、産業の発展がはかられる。しかし資本の十全で活発な活動を保証するため、投資や資本家が優遇せられる。これはデモクラシーの発展と照応し、社会経済問題に敏感となった大衆はあらゆる面にイニシアチブをとろうとしてくる。こうした社会における発展や施策の失敗から、ファシズムが起ってくると言っているのである。これについてはまた後にふれる。第三段階として、福祉国家がある。ここではマス・デモクラシーが挫折を経験せずに存在し、第二段階では、投資と資本家が優遇せられたがこの段階では人民が資本から防衛、保護されるようになる。⁽⁷⁾ として最後の発展段階として想定せられるのは、豊富 (abundance or opulence) の経済である。オートメーションが社会経済活動の各分野に現われ、新産業革命が進行するのである。

ファシズムが、経済の産業化がおくれた場合、即ちこの要因では第二段階に現われるという分析は、やや問題である。つまりこうなると各国の経済発展の段階の定義が問題となるので、この場合、ドイツを資本主義先進国と定

説 義するとドイツで起ったヒットラーによる運動は、ファシズム運動ではないことになるからである。故にさきにふれたようにファシズムは、経済的原因から考える場合は、その経済の窮迫から逃れよう、そのマイナスの状態から正常な経済運行を回復しようという場合に現われてくる短兵急な運動であるといふことができる。

論

更にファシズムは、資本主義の発展から考察する場合、農業社会からの反撥という運動から起るといふ分析もある。つまり農本主義が、資本主義の発展から阻外され、しかもそれは資本主義の発展（工業化を主として考える）に組み込まれない、また組み入れられてはその本質を喪失するというので、農本主義の人間社会とのかかわりの中の美点という主張によって資本主義の発展を阻止し、これを押しとどめようという目的からファシズム運動が起るといふ分析である。⁽⁸⁾

(1) Histoire des Relations internationales, Pierre Renouvin, Tome Huitième, Les Crises du XX^e Siècle, II, de 1929 à 1945, Hachette, 1958, pp. 22-24. 前稿(紀要九号)にのべたようにファシストは社会を全体的にとらえ、是非々的にすべて網羅的にこれを統制下に置こうとする。その中核は資本主義の取扱いとそれへの対応であること勿論であるが、これを第一階梯として強力な統制国家にすすんでゆく。その中心は「民族の再建」(redressement national)であり、ヒットラーの説くところは、種族を民族と重ねたその「種族の純潔」(pureté de la race)である。「民族の結合力」(cohésion nationale)に障害となるものはすべて取り除く。即ち社会主義者、カンリック、そして個人の集団への従属、個人主義のグループ利害への叩頭、「自治運動」(démarche autonome)の禁止、個人的自由の排除等がそれとなす。

(2) Interpretations of Fascism, Renzo De Felice, trans. by B.H. Everett, Harvard Univ. Press, 1977, p. 62. 階級システムの崩壊、大衆社会の原子化、個別化等の現象は、平等条件の増大、社会階層化の促進、知的レベルの平準化をもたらす教育の普及、そして観念の通俗化等の結果として生起するが、それよりも第一次世界大戦によってもたらされたヨーロッパ社会の平準化、分解現象に、より多くかかわっている。これらは、この大戦の敗戦国に、より一層顕著な現象である(インフレーション

モン、失業、亡命者、少数民族)。それ以外の国々では、これらは進行がおそく、いわゆる準備段階 (Preliminary stages) を通じて徐々に進行する。しかしいたるところで、それらは、二度の世界的闘争の時代と第二次世界大戦後につづく年月を特徴づけている。

(3) Italian Fascism and Developmental Dictatorship, A. James Gregor, Princeton Univ. Press, 1979, p. 319. 一〇〇の全体主義の解釈として、①一〇〇のイデオロギー、②単一多衆政党 (a single masses party) と大衆動員組織、③政治的決定権が、単一の個人もしくは、少集団に集中している覇権的権力 (hegemonic power) とこれに対する幅広い支持の存在といった要素をあげたものもある。The Grenada Documents; Window on Totalitarianism, Nicholas Djimovic, I.F.F.P.A., Pergamon-Brassey's, p. vii. また全体主義の要素として以下のものを考える説もある。①絶対的メンシア的イデオロギー、②一人のリーダーの下の厳格な、階層的単一党、③新体制下の新しい人格創造の約束、④秘密警察、軍隊 (党の機関) を通じて行う大衆統制、⑤教育、文化組織という全手段の党統制を通じて行う大衆動員と再教育、⑥中央統制経済、⑦膨張主義的傾向等。

(4) Fascism in Italy, society and culture, 1922-1945, Edward R. Tannenbaum, Allen Lane, 1972, p. 2. ファシズムは、資本主義最後のあがきである。即ち、帝国主義の理論的根拠、極端な国家主義、近代化の「プロセス」、一種のニートピア的近代主義、プロレタリア化に対する下層中産階級の抵抗、大衆叛乱のゆがめられたかたち等これらの要素は、ナチス・ドイツやファシスト・イタリアにすべてみられる。ファシズムは、本質的に資本主義経済を社会主義や革命から守ろうとする運動であるが、そこに暴力的、神秘的、反体制的外観がそなえられている。これが彼等の特徴である。

(5) Ibid., pp. 233-34. レセ・フェール (laissez-faire) 資本主義は、継続的物質上の進歩をはかることに失敗し、社会的不正義や階級闘争を醸成している。これが、昨今の世界経済的危機の様相である。またデモクラシー議会体制も不景気 (depression) をしずめることができず、ヨーロッパに種々の官権主義的体制を生じさせている。

(6) Mussolini and Fascism, The view from America, John P. Diggins, Princeton Univ. Press, 1972, pp. 145-46. ムッソリーニ・ファシズムは、自由市場の活力化を示し、資本主義はその最後の発展段階にあるという社会主義者の幻想をあざ笑う。それはまたイタリアを絶望の泥沼から救い出し、希望の輝ける領土 (realm of promise) に移す。それは一年以内に産業界の疑惑を払拭した。それは次の事柄に努力し、成功しつつある。法と秩序の確立、経済の活性化、第一次世界大戦借款交渉、諸々の産業の経営の効率化、ストライキの終熄、規律ある労働、愛国主義の高揚、勤勉、リラ (Lira) の安定、水力発電、

開鑿、航路、航空路の新増設等。

- (7) Renzo de Felice, op. cit., pp. 104-106. 資本主義発展段階説とファッシズムの関連で次の分析もある。おくれた産業化段階におけるファッシズムは次の如く考えられる。ナセル主義(Nasserism)、ペロニズム(Peronism)はファッシズムと定義される。スカルノ(Sukarno)の指導された民主主義は、プロレタリア・レベルの疑似ファッシズムである。エンクルマ(Nkrumah)の体制は、ヨーロッパ・ファッシズムの諷刺的でないな模倣である。発展途上国におけるファッシスト要素として、二元論、民族的恥辱、おくれた産業化、国家的分裂等に対する一元論的要請、新世代の登極、カリスマ的人格、新支配階級、大衆の統合、普遍的統一主義(Elativism)、産業促進、指導的経済的方式、経済的・心理的アウトアルキー(激しい保護主義)、特異な生活様式、遠心的・分離的国家勢力に反対する暴力等があげられる。

- (8) Histoire des Grandes Puissances, Maxime Mourin, Payot, 1947, L'Allemagne, p. 156. もっとも農業のファッシスト化には、一般的経済的不況の中における農業がそれから脱出したという願望を背景として有することはいうまでもない。一九三二年において、ムーン内閣(cabinet von Papen)の経済政策の二つは、農業保護策(Protection agricole)があり、その原因として農産物価格の急落があった。ちなみにいえば、この時期は産業不振があり、不景気が経済全部門をおおっていた。鑄鉄は一九二九年の生産高一、三四〇万頓が、一九三二年には三九〇万頓に激減していた。同様にして鉄は一六・二、五・七、熔鉱炉九五基、四二基であった。

二 ファッシズムと大衆社会

市民社会と大衆社会

ファッシズムが社会経済的変革の問題として生起するとして、度々説くようにファッシズムにおいては、大衆社会(masses society)の成立が基盤となる。近代では、市民社会(civil society)の成立が、フランス革命と不可分の関係にあるように、大衆社会は、ファッシズムにとって不可分の関係にある。デモクラシーの成立なく、大衆の歴史的舞台への登場なくしてはファッシズムは考えられない。

しかしこの大衆社会は、決して華々しいものではない。何故ならばそれは、フランス革命における市民社会の成立は、大きな展望と目標をもって自由、平等の炬火をかかげる人類の理想というイデオロギーに導かれ得るものであったが、大衆社会はこのフランス革命の理想の挫折、各国におけるデモクラシーの失敗、労働者階級の敗退、何かのイデオロギーの喪失という状態の中から結果してくるのだからである。そしてなお、ファシズムには、それ自身の教養とかイデオロギーはないと言われるのだが、それは、ファシズムがそれらを生み出すことがないのだと言うよりは、すでに人類は、フランス革命と共産主義革命においてイデオロギーの最高の理想を打ち出してしまったから、そこにはそれ以外のものが出現する必要がないのであり、いわば、つまり、自由平等とそしてその富 (property) の段階における平等の確立というそれは、イデオロギーという段階を越えて人類の間に常識化してしまっており、あとはその実現を如何にしてはかるかという問題が、その限りでは残されているにすぎないからである。

これ以後のイデオロギーとしては、世界的規模における人権の確立、世界国家の成立と永久平和論ということなればならないであろう。

大衆社会と自由、平等

さて大衆社会においては、人類は不安定である。ここにおいてはフランス革命において確立されたかみえる市民社会が崩壊し、階級性は原子に還元し、自由、平等の理想は、空中に浮きただよっている。資本主義の確立と発達は、自由を憲法の紙上に確立したけれど、そこにおける人間関係は、市場原理と商品交換のルールによって支配されてしまっている。即ちあらゆる封建的規制を取り除き、商品と貨幣が自由に流通する、その運搬のない手として資本主義下の人間の自由があるにすぎないという感触である。人権が確立されるどころか、人は大衆社会においては軽視さ

説、無力化し、気がついてみれば人は自らを手段化し、自らを資本に売り、労働者はエネルギーを、ビジネス・マン、医師、書記等はそれぞれ自らの人格を売りさばいて生活しているにすぎないのである。⁽³⁾

かくして大衆社会においては、人は表面層 (layer) におおつては自由主義を標榜し、享受して生活しているけれど深層においては複雑な資本主義下の市場原理に支配されて生き、心情的には革命的であることを否定し得ないのである。この二つの層の間にただようものは、これら心情を不安の中に折衷した無慈悲 (cruelty)、サディズム、みだらや (lasciviousness)、うらやみ (envy) 等々のそれらである。そしてこれらが、ファシズムの心情を形成し、その牽引力となるのである。⁽⁴⁾

この大衆社会における経済的、政治的退廃に加えて道徳的墮落は、キリスト教者の側、特にカソリックのそれからのするどい批判の対象となる。即ち神をはなれた不敬なる (profane) 人間共は、思想も教育も芸術も生活慣習もすべて世俗化 (secularize) し、安心立命の境地を自ら放棄して不安と焦躁の中に沈淪するのである、と。そしてこの道徳的墮落、退廃はファシズムが同じく非難、批判的とし、ファシズム運動推進の一要素となるものである。

デモクラシーの挫折

フランス革命の失敗とボナパルチズム勃興の経緯については、前稿(紀要九号)にその解明へのアプローチをそれなりに試みたが、大衆社会におけるデモクラシーの確立は基盤を持たず崩壊する。これが大衆社会に固有な不安と憔悴の現象と相まってファシズム勃興の地盤となる。第一次世界大戦は、その勃発と共に戦争を絶滅するための戦争 (war to end wars) と称され、またウィルソン一四点 (fourteen points of W. Wilson) は、第一次世界大戦の戦争目的を世界デモクラシーの達成と意義づけた。ボルシェビキ革命を経過したソ連にもこの傾向における戦争目的

アピールがある。第一次世界大戦は、これら世界デモクラシーを宣言する側の勝利となり、この意義は高調されるだけでなく、その実現が期待された⁽⁵⁾。

しかしフランス革命が傾斜してしまった如く、第一次世界大戦の理想も、世界デモクラシーの達成も戦後となっては日暮れて道遠しの感を深くするだけの結果と終る。あのデモクラシーの世界チャンピオンとして華々しく登場したワイマール共和国 (Weimar Republic) もこの点において、御多分にもれなかった。ワイマール共和国の下で、ドイツは民族的統一を達成し、それはビスマルク時代の領主 (Landesfürsten) の集合体というゆるい国家的紐帯を払拭する。中央政府は、軍事、通信、財政の権をにぎって強力であり、しかも地方自治の力もそこで強く打ち出された。議会制度は、参議院 (Reichsrat) と衆議院 (Reichstag) の両院制で、前者は各邦 (一八) の代表者からなり、議決権各一票をもったが、伝統的大邦主義からババリア、サクソニー、ウュルテンベルグ等の州は、全体の五分の二を超えない範囲で人口百万につき一票をこれに上積みできた。立法機関として衆議院優越制であり、参議院は立法につき停止的拒否権のみを有した。選挙については、二〇歳以上の男女による直接、秘密投票の総選挙制をとった。大統領は、七年任期で米型よりも仏型のそれと称された。こうしてワイマール憲法は、デモクラシーの典型を現出し、思想、集会、出版、信教等諸々の自由権を声高くうたうと共に、教会と国家の分離も明文化され、二〇世紀型憲法といわれる経済条項もそこに書き加えられたのであった⁽⁶⁾。

ワイマール共和国におけるデモクラシー

ワイマール共和国は、その憲法と共にかく華々しく出発したが、その実体は、実はデモクラシーというよりビスマルク帝国の組織を色濃く残したものであった。帝制こそは倒れたが、カイザーの財産は没収せられず、旧来の姓や階

級は温存された。官僚組織、司法、警察は、手をふれられなかった。大土地所有制は残存し、農地改革は実行されなかった。大企業、カルテル、シンジケート等は前時代のままで集中排除は行われず、社会経済体制は、独占資本に奉仕する如くであった。旧来の士官団も解体せられず、ドイツ国防軍はドイツ帝国陸軍の縮刷版だと称された。大学の改革は、華々しく標榜されたが、学問、思想の自由の名の下に結局は、これらに手をつけることはできなかった。かくして反民主主義、反ユダヤ主義学閥は、ナチズムのポグロム (pogrom) を準備することとさえなる。こうしてワイマール憲法と共和国は、そのたてまえの論議とは別にその実体、実行は旧ドイツ帝国のそれらをそのまま残して、反民主主義、特権主義、国家主義の温床となる様相であった。そして当然ファッシズムはこれらの現象の中となりあっているし、更にまたこれらを利用することは歴史の示すところとなる次第であった。⁽⁷⁾

ワイマール共和国の実体は、かくの如く、そのたてまえやスローガンとは実際上遠くかけ離れたものだということ
は否定すべくもなかった。そして農地改革も行われず、企業の集中排除もままならないまま、それはいわゆる体制の
受益層を欠き、この中から不安にさいなまれる大衆は彼等の救世主たるナチズムに眷恋することとなる。

労働運動の敗退

民主主義、或いは議会主義がファッシズムの猖獗した国々において中々に定着しなかったことが、第一次世界大戦後の世界的現象となるが、これに加えてそういった国々には広い見地から労働運動がまた健全に定着しないことが観取される。前者の例としてワイマール共和国をみたが、そこには立派な民主的憲法を実施しながら、実体と国民的心情がそれに伴わないという現象があった。

第一次世界大戦後の欧州社会で、労働運動が当然ソビエト・ロシア建設の影響を受けて各国、各地に広がり、その

中から赤色革命運動も現われるが、それらはロシアの如く成功しない。ここから短絡的にこういった左翼革命運動、労働運動を抑圧するものとしてファシズムが現出するという考え方もある。しかし事柄はしかく単純ではなく、第一次世界大戦後の社会においては右翼革命そのものも挫折させられるのである。そしてムッソリーニは社会党からファシズム運動に転換し、彼の新国家は前稿（紀要九号）にふれた如く組合国家と呼ばれる組織となる。またヒットラーのナチスは、周知の如く「国家社会主義ドイツ労働党」(National Sozialistische Deutsche Arbeiter Partei, N.S.D.A.P.)であり、彼自身の運動は労働運動から出発したとみられる。⁽⁸⁾

こうしてファシズムの解明は、困難な面を多くもっている。結論的には、ファシズムは、強権主義国家体制と労働運動の抱合の中から生れてくるといえる。左翼革命、右翼革命が、その一方の強力だけでは成就しないという時代相がそこに観じられるのである。

ワイマール共和国をもつドイツを例にとってみると、第一次世界大戦直後のドイツでは、ソビエト・ボリシェビキ革命の影響を受け、トロツキー等が熱望して期待したドイツ左翼革命が生起する。キール軍港の叛乱と共にこれに呼応してドイツ各地に労兵会議が打ちたてられ、その中央執行委員会も生れる。ドイツ・ソビエト会議の開催等も行われるのである。そのクライマックスは一九一八年一月のババリア地方のクルト・アイズナー(Kurt Eisner)左翼政権の樹立、翌年一月六日から勃発した左翼スパルタクス団(Spartakus Bund)と政府軍の凄惨な市衛戦。そして一九一九年春からはじまったババリア社会主義共和国の建設である。かくドイツ・ボリシェビキ革命は、生起し、赤色ハリケーンの中で成功し、定着するかにみえたが、実情はさにあらず、これらすべては失敗に終り左翼政権関係者は、ほとんど殺戮されてしまうのである。こうした左翼蜂起の潰滅は、ドイツの民主的傾向、労働運動の発展に暗い

影を落とす、その明日を憂えしめることとなる。これが、ドイツ国民をして更にその民主化、労働運動の盛行を挫折させることとなり、このやり切れなきと、不安とがさきにのべたファシズム生起の暗い背景につけ加えられる。⁽⁸⁾

しかしここに例としたドイツの政情も決して一面的なものでなく、この左翼革命の払拭された後、五千名にも上るいわゆる純粋右翼の蜂起が、一九二〇年三月初旬からベルリンで起り、五日間の騒擾になる。この時は、ベルリン労働戦線が中心となってこれに抵抗し、ゼネストをもってこれに対抗、その挫折を導くのである。

論

(1) Fascism, Martin Kitchen, Macmillan, 1976, pp. 2-3, 13 & 73. 大衆社会とは如何なるものかの定義は頗る困難である。ここに現われるのは、いわばネガティブなるそれらとも称すべきものである。ハングリー、侵害、失望、阻外といった現象に悩む大衆 (Clara Zetkin)。現在の不景気から逃れようとする大衆、その哀れな状態は、大企業家と大地主の生み出したものである (Karl Radek)。デモクラシーと自由に対する大衆の脅迫、プチ・ブルジョアの反近代と反資本主義、これらが大衆を引きつける。現実の体制的政策はすべて大資本寄りである (Wilhelm Reich)。農民とプチ・ブルジョアは、社会において統一なく孤立した個人の集合体にすぎない。この両グループは、容易に新救世主の意志に従う (M. Kitchen) といったものが大衆社会の構成として定義づけられる。

(2) The French Revolution, A. Goodwin, Hutchinson Univ. Press, reprinted, 1968, pp. 71-76. フランス革命の時、一七八九年八月四日、特権階級は、革命の脅威の前に彼等の特権を次々放棄する宣言を行った。その中には、教会の一〇分一税 (ecclesiastical tithes)、市、法人、地方にかかわる免税権、特権的収入等が含まれていた。そして八月二六日、天賦の人権が高調なれ、人権宣言 (Déclaration des droits de l'homme et du citoyen) が発表された。これには人の自然権として、自由、財産、安全、抑圧への抵抗権、宗教、集会、出版、言語等諸々の自由権、市民的平等権、租税負担の平等権、法の前の平等権等がもろこまれ、代議政治を確立する法は万人の意思 (volonté generale) の表現という原理もたわれた。A History of Russia, Paul Duker, Macmillan, 1974, p. 231. 共産主義の理想は、国家を必要悪とみたキリスト教哲学者の思想と共に歩む。国家は階級闘争の結果出現し、従って階級の消滅をはかれは自然に国家は消失する。そしてその時、社会は自由な平等な生産

者の集合体という基礎の上に繁栄するのである。

- (3) *La France du front populaire, jacks kergoat, éditions la découverte, 1986, pp. 11-12.* 市民社会の成立を目指して打ち立てた新社会は、資本主義が猖獗し、何時の時代でも市民はその支配者とはならず、それに翻弄されるのみである。この状態は一九三五、六年においてもかわらぬことは勿論であり、例えばパリの百貨店では月給は六百フランであったが、均一店(Prix uniques)ではそれは二五〇フランであった。またフランス・カルソヌヌ市の労働者の日給は、一九三二年には三七・六フランであったのが、一九三五年には三〇フランにすぎなかった。リモージュでは、一〇万人弱の人口のうち八千人が失業者であり、レイゼルでは一九二九年と三三年の間に、その比は三万人対四千人であった。ラバルにおける履物工場では、日給は一ニフラン以上あったが、労働日は週たった三日しかなかった。

- (4) *R. De Felice, op. cit., pp. 81-86. Erich Fromm* は次の如く言う。ファシズムはただ単なる政治、経済現象ではない。それが数百万の人々の心をとらえるということを考えねばならない。問題は心理的である。ファシズムがアッピールする人の性格構造(character structure)、そしてそれを人々の効果的な手段と化させるイデオロギーの心理的特色(psychological characteristics of the ideology)が、その場合重要である。ナチスについて言えば、Mein Kampfにあるサシスチックな官権主義的な面が重視されねばならない。人々を権力に駆りたてる力、そして抗しがたい外部の力に従属したいという願望、それらが分析、把握されねばならない。ナチズムに心酔することもなく、またその渴仰者となることもないのに、ナチ・イデオロギーとその実行に叩頭する心理がその対象である。

- (5) *Pierre Renouvin, op. cit., Tome Septième, Les Crises du XX^e Siècle, I, de 1914 à 1929, Hachette, 1969, pp. 88-90.* ウイルソン一四点は、第一次世界大戦の平和達成の基礎として一九一八年一月八日、宣明せられた。秘密外交の廃棄、経済国境の廃止、軍縮といったやや漠然とした主張、航海の絶対的自由、民族自決主義に基づく国境画定原則の確立、即ちベルギー、イタリア、バルカン諸国、ポーランドにおける民族国家主義の確立、フランスのアルザス、ロレーヌの回復、ロシアの再建と国際社会復帰、国際連盟の創設、連盟は大小に拘らずすべての国に政治的独立と領土的な一体を相互に保障する、等がそれであった。*The Gentlemen Negotiators, A Diplomatic History of World War I, Z.A.B. Zeman, Macmillan, 1971, pp. 236-37 & 255.* ボルシェビキによる平和提案は、一九一七年二月二日よりのブレスト・リトウスクにおける独逸側との休戦交渉の際、行われた。これらはカイザー、国王の廃立、全交戦国への平和アピール、全植民地、全被抑圧民族の解放、

ロシア人によって抑圧されていた全民族の解放、戦争による領土併合の廃止、各民族の政体決定の自由、少数民族の文化的・行政的自治、戦災者への賠償支払い等の主張であった。

- (9) *Explications de Textes historiques, de La Revolution au XX^e Siècle*, J.P. Brunet et A. Plessis, Collection, U₂, Armand Colin, pp. 424-25. フォーレル共和国憲法の背後には、言わずと知れたネルサイニ平和条約があり、この条項がドイツを緊縛していたことは言うまでもない。特に Kriegsschuldfrage (戦争責任) と sanctions (制裁) 条項は、ドイツの現実とイデーの上に暗い影を落していた。ウイルソンもこれにつき戦勝国としてのドグマを利用することを知っていたし、ポアンカレ (Raymond Poincaré) はさびしく開戦責任 (déclaration de la guerre) をドイツに求めていた。一九二五年までのドイツ各政府がこれら条項の廃棄を求めて活動したことはかくれもない事実である。このことが、ワイマール憲法の実施云云の問題よりも、ヒットラー等によって、後年、ファシズム抬頭の明確な契機とされることも、また明白な事実である。な⁴⁴ *Twentieth Century Germany, from Bismarck to Brandt*, A.J. Ryder, Macmillan, pp. 204-10 参照。

- (7) Maxime Mourin, op. cit., pp. 136-37. フォーレル憲法が、二六二対七五票で採択されたのは、一九一九年七月三一日であり、これが発布されたのは、同八月一日であった。これは事実上、新旧両ドイツ体制の折衷物であった。集会 (Assemblée) は国会 (Reichstag、旧ドイツ帝国議会もこう呼ばれていた) となった。ドイツ共和国 (L'Allemagne républicaine) は、中央集権と連邦制の中間物といえた。それは自らを共和国とは呼ばず、ドイツ国 (Reich allemand、一八七一年以来のドイツ帝国もこの国名) と呼称した。国旗 (drapeau) も帝国のそれであった黒、赤、金の三色旗となった。大統領は国会の解散権を持ち、閣僚は彼に対して責任を負った。中央集権主義はドイツ各邦が、地方的発議権以外保持しないということにあらわれていた。社会的見地から、所有権は維持されたが、それは労働者、従業員も加わる企業会議の事業管理に従うこととなった。労働組合、企業連合 (syndicats) 等は合法的となった。しかし、その時クレジットの処理を必然的なものとした経済の社会主義化 (socialisation économique) は、後に残された。

- (8) *encyclopedia of the third reich*, Louis L. Snyder, McGraw-Hill, 1976, pp. 335-36. ヒットラーのナチス運動当初からの同志であり、最強のライバルであった人物として、G・ストラーサ (Gregor Strasser, 1892-1934) がある。彼は純粋社会主義 (undiluted socialist principles) の信奉者であったが、次のプランを提示した。それは即ち経済を左の五部門、(1) 農業、(2) 職工、(3) 産業、(4) 商業、(5) 銀行と知的職業 (professions) に分け、地方から国政レベルまでこの五部門に夫々経営者と労働

者 (white and blue-collar workers) の経済会議を「ラミッド型に設ける」というものであった。これに対しヒットラーは信念のある経営者は、彼の財産がある日突然権利から義務に代るということを認めるか、資本が同様に支配せず、支配されるということに承諾するか、また問題なのは個人の生活ではなく全体なのだということ、一兵卒の死の犠牲が、すべての労働者の社会に対する奉仕の態度となるべきだということを人々が素直に承認できるのか」と言っている。Hitler, *Memoirs of a Confidant*, ed. by H.A. Turner, Jr. and trans. by R. Hein, V.U. GmbH, 1978, & Yale Univ. Press, 1985, pp. 54-57 参照。

(5) *Les relations franco-allemandes, 1815-1975*, Raymond Poidvin et Jaque Bariéty, Armand Colin, 1977, pp. 243-44.

ドイツにおけるこういった革命騒擾は、ドイツの何物もかえなかったとさえ言い得る。革命は、企業の社会主義化を実現しなかった。古いドイツ大企業は、ワイマール・ドイツにそのまま残った。彼等は企業の所有権と決定する権利を保有した。社会民主党と企業連合 (*Les syndicats*) は、一九一八年一月の混乱期に、大企業ステンネス、ベークラー、ボルジッヒ、ラテナウ、シーメンス、フォン・ローメル等を頂点とする大企業群と会談し、彼等との協同 (*la coopération*) を受諾させた。これは経済民主化 (*démocratie économique*) の範囲内で、彼等と労働団体 (*communautés de travail*) との協定を目指したものであった。しかし事実上、ドイツ帝国政治機構を破壊する前に、経営者や社会民主主義者と彼等の活動的組合 (*syndicalism*) がドイツの運命を決定する鍵をにぎることが問題であった。革命による権力掌握の指導者である社会民主主義者は、全く複雑なドイツ経済機構を機能させる力をもたなかったし、経験もなかった。一九一九年を通じる革命パルチザンの群小諸派が淘汰されたことが、旧権力配分の事実的狀態を再び定着させてしまった。

三 ファシスト心情

大衆社会の不安と憔悴

さきに人々の不安と焦躁の生活圏となった大衆社会について考えた。それは、

① フランス革命の理想は裏切られ、市民社会の成立は結局、資本主義社会の流通法則たる資本と商品の交換流通の媒介物となった個としての人間の悲哀がにじみ出るのみの場となった。

② 大衆社会にはフランス革命のイデオロギー、ボルシェビキ革命のイデオロギーを止揚する如きものはなく、ウイルソン一四点、ボルシェビキ宣言も空しく、人々にとっての問題はこれらイデオロギーの内容を如何に具体的、早急に実現するかにかかっている。

③ 大衆社会においては、左翼革命単独、右翼革命単独の強力では、②の目的達成のために人々をひきつけ得ない。これはイタリア・ファッシズム、ドイツ・ナチズムの台頭にみられる顕著な特徴である、となった。

かくして大衆社会においては、デモクラシーの空洞化、労働運動の敗退等が現実化し、不安と焦躁の生活は窮迫する。経済的失調が社会に甚大な悪影響を及ぼすことは、何人も首肯するところで、ここに今更らしく喋々する必要もない。しかしこの大衆社会の不安に経済的失陥が加われば社会は、混乱する。

大衆社会における不安と憔悴の現実と動向は、かくの如きものであり、これが社会不安となって人々の頭上におおいかぶさるのであるが、そこから抜け出すため大衆が摸索する道は、如何なるものがあるかが問題である。健全なるデモクラシー回復の道に努力するか、左翼、右翼革命、或いはクーデターに走るか、ファッシズムの道をとるか、種種考えられる。⁽¹⁾そしてここにおいては、こういった大衆社会からファッシズムが生起する道とその諸要素を考究しながらさぐってみようとするのである。

大衆社会の星雲的欲望と深層革命心理

大衆社会における人々の心情が右に考察した如きものであるとして、これらを第一心理層と規定するが、これに対し、人々は如何に反動するかということが次の考察でなければならぬ。大衆社会においては人々は、その社会的支配機構から疎外されている。いや人々の大衆社会における状態は、人々がそもそもその社会そのものに組み込まれて

いるかどうか、生産活動に対する階級構成的連関 (relation of class structure to the system of production) において彼等が如何なるイニシヤチブを發揮できるかが、そもそも危ぶまれる状態であるというのがその本質であるといわなければならぬ。かくして大衆社会における人々は、資本主義経済機構のますます発達、發展する機械的冷厳な運動の中でいよいよ無価値 (insignificance) であり、孤独である。

この中で人々は、自己の本能的衝動を社会環境と条件に適應させるために形成するという意味での、自我 (ego) を確立するという近代社会成立の大原則そのものを捨て去ろうとする。自己中心主義 (egoism) とこれにまつわる様な個人的悪と社会的悪を抑制するとされる上位自我 (superego) を彼等は逆に自ら抑圧しようとするのである。これは大衆社会における神秘的な生命観とかまた擬マゾキズム的性格 (pseudo-masochistic character) の露呈ということになる。こうして人々はやもやした (nebulous) 欲望を満たされることなく持続し、情緒不安定の中で皮相的な上層におけるよきマナーを堅持することを表明し、保守的、時には反動的な社会観念を演出すると共に一方その深層心理において、反抗的革命的感懐を醸成するにいたるのであるが、これはこの心理的変革過程を経てのこととなる。これが大衆社会において人々の心情が、基本的な背景としての資本主義社会と市民社会のギャップの増大の中から、更にその過程の進行の中で起ってくる、社会的人間心理の不安定の現象として生起する、いわばその基本的第二心理層として表現されなければならないものである。

第一次世界大戦と市民社会の崩壊

資本主義社会の発達と共に、封建的社会を蟬脱して自由、平等、友愛、個性の尊重という人間生活の基本的理想を實現するための市民社会の発達がはかられ、これが資本主義の発達と平行して進展するべきところ、これら二つは乖

説 離し、今みた如き市民社会の破綻は大きくなり、封建社会の諸矛盾を止揚すべき市民社会もそこに資本主義発展の属

性として社会生活上の諸矛盾を露呈する。これが大衆社会の成立、混乱となって現出する。

論

これにつき考察を加えたが、この大衆社会における人間心理の動揺は、これに戦争の惨害、経済的破綻が加わると当然のことながらその社会心理的動揺は、甚だしいものとなる。即ち経済活動の停滞、インフレーション、失業、収入の喪失といった現象がこれに極度の悪影響を及ぼす。大衆社会は諸矛盾を含んで膨張し、いわゆる都市中産階級は父権の転落 (decline of the prestige of father)、権威の失墜、力の喪失、富の欠乏といった悪現象をもろに蒙って呻吟し、プロレタリアートへ分解してゆく。⁽³⁾ こうした事象を仮に大衆社会における基本的第三心理層と呼ぶことができる。とすれば、この中においては第一心理層として認められた表層的よきマナー、保守的心理表現はおいおいその影をうすめてゆく。

大衆社会のファッシスト心理

こうして大衆社会は、社会的挫折、社会心理的破綻、よきマナーの喪失、深層革命心理への影響等がはけ口なく渦巻き、この社会は漠然とファッシスト社会に移行する。そこでその契機は何か。その過程は、また推進力は、といった問題が次に考察されねばならない。精神的災厄は、人生の大変災をもたらす。大衆社会の人々はしかしこの市民社会の崩壊現象に、実はただ手をこまぬいているだけではない。彼等は当然そこから抜け出そうとする。彼等が抜け出そうとするのは、まず自分達の無価値性と孤独であり、社会機構、生産段階への明確な組みこまれ方である。勿論その他富の回復、力と権威の充足、社会経済条件の改善、自由、平等、友愛、独立、個性の確立ということも望まれ、彼等の欲望は実に様々なもやもやとした星雲状の渦巻くそれとなって拡散する。ファッシスト軍団が、利用し、その

中に自らがとけ込んでこれを牽引してゆくのは、この社会心理層におけるこの現象である。

本来保守的観念の強い大衆社会の人々であるが、この状態の中で、深層心理としての革命的指向という要素をだんだん強化してゆく。それはみた如くであるけれど、なお大衆社会は、この表層的保守的皮膜を自ら破ることはできないのである。これを破り、輝かしい明日をその中から描き出してくれるものがファシスト集団である。⁽¹⁾いまこの場における大衆の社会心理をこれらの現象により分析してみると次の如くなる。

- ① 社会的無価値性、孤独性が極端化する。
- ② 深層心理としての革命的指向は、感情的、感覺的、知的表出をとるのみであって、大衆社会としては統一性なく、そこでは集約的な力は働かない。
- ③ 大衆の国際的政治心理も、彼等の合理的、団結的行動の企図において十分に機能せず、結局効果を發揮しない。
- ②、③(前段)の現象からつまるところ、彼等の社会民主化の達成は甚だ覚束ない。
- ④ 伝統を重んじ、優越的価値という意味で、先祖の遺産を尊重する。輝かしく、国際的に誇れる歴史的事実を有することを確信している。保守性は一面この意識から発する。
- ⑤ 保守性と共に道徳的教化、道徳退廃の嫌悪、宗教性への回帰、世俗化の推進への危惧等の心理を有する。
- ⑥ 強きを愛し、弱きを嫌うが、権力に対しては二面的感情を有するから権力に強く齒向い、挫折したものは同情を表する。(以上六つを以後、大衆社会のファシスト心理と呼ぶ。)

大衆社会における心理要素を保守的観念と革命的深層心理、諸々の星雲状ともいえる社会的欲望といったものの中で、箇条書きしてみるとこれは、右の如くなる。これらの心理要素もしくは心理現象は、第一次世界大戦以来、その

説 道徳的、経済的、社会的、政治的面上における大衆社会の破綻から生じた危機意識の中で明確化し、かつ極端化してゆくのである。

論

(1) Political Man, The Social Bases of Politics, Seymour Martin Lipset, expanded edition, Johns Hopkins Univ. Press, 1981, pp. 92 & 134-35. 諸々の国の世論調査によると、政治システムとしてのデモクラシーに執着する程度は、上、中級クラスに比して下級階層が最もすくない。急進派運動は、異なる発展段階における大衆階級の産業化に対する解答として生起する。これらは当然、すべてデモクラシーに対する脅威である。労働階級による急進主義は、それが共産主義者、無政府主義者、革命的社会主義者、ペロニスト (Peronists) のいずれであれ、産業化が急速に進行した社会に最も普通に見出される。これら社会では産業発達が、種々の夾雑物を含むからである。中流階級急進主義は、大規模資本主義と強力労働運動に特色づけられた社会に起る。右翼急進運動は、伝統的保守主義が玉座や祭壇と結合している経済的後進国に最も普通に生起する。フランス、イタリア、ワイマル・ドイツといった国々は、これらすべての三つをセットで有しているから、これら三つの急進派政治は、同一の国に存在し得ると言える。富裕な高度産業社会をもち、都市化された国民はこのビルスから免疫されているように見えるが、しかしカナダ、米国においてすら、自営業も何かしら不平不満を有しているという証拠がある。

(2) *Ibid.*, pp. 47. マルクス (Karl Marx) はフランス大革命以後、政治学において闘争 (conflict) の問題に最も関心を示した。彼は闘争と協調 (consensus) の二つを対置させる。即ち、闘争の社会と協調の社会を。後者においては、闘争の原因は除去されている。それ故に国家権力に対置されるべきデモクラシー施策は、ここでは不必要である。それらはずまり、権力の分立、法的保護の保障、権利章典といった憲法等である。ロシア革命は、すでに現実非存在のこの二つの理想社会、完全な協調のそれと、絶えざる闘争のそれとをのみもつ理論の活動が如何に恐るべき結果をもたらすかを如実に示してきた例である。Hitler, *Memoirs of a Confidant*, op. cit., pp. 217-20. ヒットラーは、自己の目的達成を議会主義で遂行した。彼の目標は大衆党で、その要素は三つあり、一は前線の兵士、もしくは兵士型の人間。二は旧政党の弱い、中途半端な施策にあきつた反選挙派。三は国家破滅と旧政党の失敗に怒り、旧党委員会に失望している若い世代というそれらである。Fascism in Europe, ed. by S.J. Woolf, Methuen, first published in 1968, this edition in 1981, pp. 47-50. イタリア・ファシニ

トは、大衆の把握を選挙戦と擬似軍事暴力によって果した。前者では、ファシズムは地方によって時により共和派となり、サンジカリストとなり、国家主義者となつて、それら夫々の社会的結集や政治的伝統を利用した。例えば、ローマニアでは社会党反対の地盤に共和派としてくひ込み、低地ポー渓谷ではサンジカリストとしてカソリック労働組合の組織を破壊した。アルト・アデッジではイレンデンチズム(irredentism)に訴え、メゾジオモではローマ進軍の後、民族主義者に反対して地方権伸と同盟した等、これらがその例証である。

(c) John M. Keynes, *The Economic Consequences of the Peace*, 1919, Macmillan, 1971 and *A revision of the Treaty, being a sequel to the Economic Consequences of the Peace*, 1922, Macmillan, 1971. 経済問題の解決が、全般的問題解決の基礎であることを強力に訴えたのはケインズであった。その時期は第一次世界大戦直後からである。この二著は、連合国の対独痛めつけ政策に右の意味から駁撃を加えるものであった。その目標は、具体的には巨額賠償、ドイツ都市の占領、ルール占領の脅迫、上部シレジア人民投票結果の改竄、戦時年金(pension du militaire)、戦時別居(separation militaire)手当、戦害過大評価等である。これらは直ちにやめなければならぬ、とケインズは言う。その真意は、これらを強行すると右翼や左翼の革命がドイツで勃発し、欧州は再び大災厄を背負いこむぞ、というところにあつた。そして、ケインズはドイツを復興させ、これを再び欧州経済圏に素早く組み入れることが、戦争で荒廃した欧州を建直す大きな要素であるとも主張した。なお、大阪経済法科大学法学論集、第一一号、一九八四年六月、『N・チェムバレンの宥和政策とケインズ』講和の経済的結果』、同第一二号、一九八五年八月、『N・チェムバレンの宥和政策とケインズ』条約の改訂』(いずれも拙稿)参照。J.P. Brunet et A. Plesis, op. cit., pp. 426-46. 一九二五年四月にはじまる英国の金本位制復帰による英国経済の大変革に対し、ケインズはその為替レート一割切上げ、デフレーション、産業合理化、操業短縮等に先の理由と同一線上でこれらを批判した。ことに賃金引下げ(賃金の引下げ(réduction des salaires monétaires)、生活レベルの低ト(depression du niveau de vie))等には具体的に反対した。失業者数は当時百万単位で常に計算された。

(4) Fascism, *A Reader's Guide, Analyses, Interpretations, Bibliography*, ed. by Walter Laqueur, Univ. of California Press, 1976, pp. 19 & 55-56. 種々の社会層は、組織された労働者階級の政治的野心に同情を表せず、敵対的である。そして社会において、彼等は脅威されていると感じている。そこには反ブルジョア、反資本主義の感情とプロ私的所有権とプロ中産階級のそれとが混在している。農民は、工業製品の値上がりと農産物価格の低落、都市住民の安い食糧品希求、農産物輸

入の悪影響、政府の貿易政策への反感等によってイライラしている。工人階層もこの事情は変らない。その他大衆は、企業の高収益度、インフレーション、戦鬪的労働者階級、戦時利得者、ジユウ、外国企業の収益等にも感情的に反対である。そしてファッシストが利用するのは、まさにまぎれもなくこうした社会階層の心理現象である。

ファッシズムは人間の感情、涙もろさ、冒險主義、英雄主義、言葉よりも行動、死といった、一九世紀ローマン主義国家運動、無政府主義、ボヘミアン知性派等に無縁でない心理的要素に訴えて、大衆を牽引する。

四 ファッシズムの勃興

ファッシスト軍団

大衆の右にみた如き社会的、経済的、道徳的、政治的危機に対する反動は、表層的保守的観念と、深層心理的革命指向との分裂、權威に対する隷従化と謀反的心理の矛盾としてあらわれるが、これは一面大衆が、自らその社会的矛盾、経済的混乱を癒そうとする直接行動をさげるところから結果するものである。大衆は常に権力に対して距離を置き、それに対しては、たくましく、したたかでありかつ冷酷である。

こうした表象の中で、既成の権力や政治が大衆の政治的、経済的、精神的、社会的桎梏を氷解させ得ず、大衆の星雲状的欲望を満足させ得ないとならば、満足しない大衆のために新しい権力と政治が出現しなければならぬ。この表象の中からとそしてこの社会経済的發展段階で現われるのが、ファッシスト軍団である。それは小集団で台頭し、軍事的組織と規律をもって大衆にのぞむ。この軍団は、ヒットラーのナチス、ムッソリーニのファッシオ・デ・コンバチメント (Fascio di Combattimento)、日本の軍部 (この集団については、ペロニズム (Peronism)) との関連で説明が必要とされる) 等、まず小集団で現われ、目的的であり、鉄の団結をもって一揆集団の有すべきイデオロ

ギーによって導かれる。彼等は、従つて一個の政治目的の有機体として行動することができ、大衆社会の民衆に働きかける。それは先にあげた大衆社会のファシスト的心理に訴え、これと相牽引するのである。⁽¹⁾

市民社会にしろ大衆社会にしろ民衆は常に新しいものを望み、期待する。その意味で民衆は、常に流動的である。この時大衆社会の民衆の前に、新しく、強くそして目的的统一集団が現われると民衆は当然まずこれを歓迎し、星雲状的欲望を発してこれに漠然たる世直しの期待をかける。これは先にみた大衆社会のファシスト心理（以後「大フ心理」とよぶ）の「②と⑥」に読みとれるものである。自ら統一性なく、集約性をもたない大衆は、この強固な統一体をみて眼を見張りこれに鮮烈な息吹きを感じるのである。そしてこの統一集団のリーダーシップに従属の決心を固めてゆく。

ファシストと市民社会の理念

ファシスト集団は大衆社会の道徳的、経済的、政治的、社会的危機の波に乗つて出現するし、その権力掌握と共に計画経済を志向し、またいわゆる統制経済システムを導入するべく画策するが、それが最初出現して大衆と接触する時は、彼等のもやもやとした広漠な欲望の充足に訴え、また彼等の神秘的、マジキスチックな感情に訴えて彼等を牽引しようとする。

大衆社会は常に腐敗し、墮落するが、一方大衆は倫理、道徳觀念強く法規範意識もまた強固である。それは「大フ心理5」にのべられている如き状況である。かくして大衆社会において民衆は、道徳的、社会的危機において民心と民衆生活の墮落腐敗を防止し、これを倫理、道徳の確立に転回しようとする正義観の強いものをもっているが、統一性なく、また集団的行動の契機をもたない彼等には、これは不可能に近い。ファシスト集団はこの時倫理、道徳、

説 法規範を回復するため、大衆のこの心理状態に訴え道徳的啓発、倫理的たて直し、世俗主義の修正等のスローガンをかかげて強力に大衆社会に統一運動を展開し、大衆を引きつける。特に性道徳の退廃している大衆社会においては、この意味におけるファッシスト集団躍進の契機は大きい。⁽²⁾

ファッシスト集団は、社会心理の腐敗、倫理、道徳觀念の欠如、性生活の退廃等の現象に対して、「大フ心理5」に現われた如き大衆社会の自律性に着目し、その匡正を声高く訴える。これは、これら腐敗、墮落をためなおさなければならぬという叫びとなる。そして大衆はこれに引きつけられる。その際にこれらの退廃から抜け出すための手段として規律と訓練が主張される。そしてこれはそれなりによいとして、ここで重大な問題が起ってくる。それは彼等がこれら腐敗、墮落の原因を自由、放縦に求め、個人主義と利己主義を重ねてこれらを大衆社会混乱と汚濁の元凶なりとして攻撃するに至ることである。これが最も問題であり、このことが容易に起ると大衆社会は市民社会に健全なる回帰を志向するどころか、それらの契機を喪失する方向に向うこととなる。こうして近代ではフランス革命以来主張され、その実現の土台が幾多の闘争と困難を乗り越えてはかれてきた理性 (reason)、自由 (liberty)、平等 (equality)、友愛 (fraternity)、個性 (individuality) の大原則、ひいてはデモクラシーの原理がここでまた否定されることになる。⁽³⁾ ファッシスト集団はこれらを利用し、ここを攻めて彼等の権力の確立、政権の樹立へ邁進する。そのプロセスの一つの型は次の如くみられる。即ちファッシスト集団の右の活動から

- (1) 大衆は彼等の民主主義的理想主義と政治的民主主義への忠誠 (loyalty) を放棄する。例えば、労働者と農民はいち早くこれらからはなれ、労働組合は、巨大な失業保険機関へと変貌してしまふ。
- (2) 「大フ心理4」の内容は、これらの感情が容易に権威に対するあこがれを生じさせ、伝統と歴史感覚の尊重か

ら官憲主義政府 (authoritarian government) の出現を待望することとなる。

(3) 「大フ心理3」とそれに「2」との状況により大衆は、不確実な政府の対外、対内政策に憂鬱となり、これが保守的、反動的な政治グループに眷恋を感じる要因となり、この不確実さが大衆の安定的行動パターンに動揺を与え、彼等は甚だしく感情的となって暴力を肯定するようにさえなる。

ファシズムと偶像

大衆は、ファシスト軍団に影響せられて、社会汚濁、混濁の要因として自由放縦と重ね合わせた理性、自由、個性の市民社会原理を放擲するが、大衆は、ここにおいて「大フ心理4、6」にあらわれる社会心理を土台として権威主義と偶像礼讃の方向に導かれる。即ち理性、自由、平等、友愛、個性の哲理を犠牲として反デモクラシー言説に極めて敏感となった大衆社会の民衆は、強きを愛し弱きをくじく心理から次の段階では、指導者原理を受容し、国家の権威と伝統と民族的歴史的誇り尊重を前面に強く押し出すようになる。この強きにあこがれる民衆心理は、偶像崇拜となりこれが転じて指導者を仰ぎみることからそれへの従順、はては限りなき権威とその附合物への隷従となる。即ち自らの自由、平等、理性、友愛、個性に根ざした自律と自ら自らを統御するための責任をとるという立場、集中心力、忍耐性、責任感、自立性、積極性、目的意識性等を捨て去ってこれらを他人にこの場合は、彼等の偶像性をもった指導者にゆだねてしまうのである。

即ち表層的保守性と深層心理的革命指向、そして感情的な大衆社会（「大フ心理」に分析された大衆社会心理）において、集団統一性なく、集約性なき大衆は、強固な統一集団としてのファシスト軍団の大衆社会運動に導かれ、このような場合、かかる現象が結果するのである。

理性、自由、平等、友愛、個性を偶像の祭壇に犠牲として捧げた大衆社会には、従順と従属が支配しようとする。表層的保守主義は、官憲主義にとつてかわられ深層心理としての革命指向は、ファシスト集団がなうこととなる。感情と統一と集約性も彼等のまがうかたなき属性である。ここまでくると倫理、道德の回復からはじまる市民社会からの乖離、ファシスト社会の形成は目前である。

ファシズムと民族、歴史、伝統

ファシスト集団が、大衆社会の中から造出しようとするファシスト社会へのその転換の心象的契機は、社会的心理統一、民族、歴史、伝統といったメルクマールである。しかしこの転換の契機の中で、これらをつらぬく一つの要素は、やはり強さ (strength) である。大衆社会は、ファシスト軍団の牽引によって彼等のいわゆる最高の集団的利益に奉仕しようとする。非集約的、非統一的、感情的大衆社会をファシスト社会に導き入れる時、まず大衆社会の心理的統一 (psychological unity) がはかられる。大衆社会をファシスト集団と同様の、強固で自律的集団に編成しなければならない。ファシスト集団は、この場合、民族的新理想主義者 (nationalistic neo-idealists) として現われる。しかしここでもやはりすべてをつらぬくものは、強さの論理である。⁽⁵⁾ 大衆社会を牽引してその社会的統一を達成するため、大衆に示されるものは、その統一の中から達成されるべき目標である。それは集団が大衆に示す彼等の星雲的欲望に達成の契機を与える政策である。強力で達成可能と信じられるべき経済政策、積極的対外政策、これらを支持し得る強力な軍事力の造成等がそれらとなる。これは「大フ心理4と6」に示されている大衆社会心理に適合する。ファシスト徒党集団が達成しようとする大衆社会のファシスト社会への転換は、ここまでくるとその成就是、彼等の射程内にとらえられているというべきである。

この心理的統一に向って大衆を感奮興起させる要素として、民族、歴史、伝統がある。これらが「大フ心理4」に分析される如き大衆社会の民衆の、あまりに感情的な感情(狂信性(fanatisme)、ヒステリー(hystérie))に訴える要素となる。ファッションスト徒党集団によるこれら要素に附帯される内容は次の如きものである。

民族 || 血と言語の同一性に根ざす強固な統一体であり、この関係は自然法と考えられ、何人もこれを破ることはできない。この意味における民族の訴えが、大衆社会の心理的統一に果す役割は当然大きい。民族は、代々の価値の世襲財産(heritage)であるけれども、単にそれだけと考へてはならない。それは力の成長であり、民族は存在することと芽をふき、生育し、花を咲かせ果実を生じる。民族の存在は一つの生成である。⁽⁶⁾

歴史 || 民族に対する歴史は、民族の存在を強固にする忠誠心(loyalty)の発露であるが、これも単にそれにとどまらず絶えざる創造(creation)そのものである。歴史は、民族の発展をてらす炬火である。

伝統 || 「大フ心理4」にいう如き民族の栄光と誇りを民族存在の精神的核として受けつぐもの。民族の優越性、優越性を立証する精神的、物質的諸々の事象。⁽⁷⁾

ここにあげられた諸要素をもって、また利用してファッションスト徒党集団は、大衆社会の混沌に働きかけそれらに内外から影響する活動を展開して、まずその心理的統一をはかり、そこから大衆社会のファッションスト社会への転換を強力に推進する。以後様々の政治、経済、思想、社会的ファッション化の施策、宣伝、運動がこのために行われる。このことは勿論ここに喋々するまでもないが、大衆社会をファッションスト社会へ転換させるためこれらの社会的心理統一を導こうとする彼等の活動は、それらへの第一歩であり、その運動の基本的土台を形成するのである。

大衆社会は、世俗主義の推進の中から現出し、そのために道徳、規律を喪失して苦しむということがいわれる。こ

説のため、ファシスト社会への社会的心理統一をはかる場合、それらを回復もしくは打ちたてるため、ここで宗教がその一つの要素として利用せられるということがあり、宗教もこの場合、民族、歴史、伝統という要素の中からも主張されることとなるということを、ここでこれら諸要素の最後につけ加えておかねばならない。⁽²⁾

(1) Power Politics and Social Change in National Socialist Germany, John M. Steiner, Mouton, 1975, pp. 47-71. ナイツを例にとると、ヒットラーの手下とも称すべきS・Sは、ヒットラーの活動をはじめると共に組織されたと言つて大過なく、その大体の完成は一九三三年とされる。S・Sは「防衛隊」Schutzstaffelの頭文字である。軍隊組織でまた警察補助隊ともなった。しかし、よく知られている如くS・Sよりも先輩で、強力な同種の組織にS・Aがあつた。これは Sturmabteilung (Storm Detachment)「突撃隊」の頭文字である。政治軍として活動し、後、警察補助隊となるが、その組織は一九二一年にドイツが上がっており、一九三二年には隊員四〇万を数えていたといふ。しかし、勢い強大に過ぎてヒンデンブルグ (Paul von Hindenburg) に一旦解散を命じられ、またヒットラーに於ては一九三四年六月の「ローゼンバウム」(Ernst Röhm) 以下幹部を殺され、S・Sの下風に立つようになる。Histoire de l'Italie, du Risorgimento à nos jours, Sergio Romano, Editions du Seuil, 1977, pp. 182-83. ムッソリーニの場合には、一九一九年から二二年にかけての不況期に対し、ローゼンバウム (marcia verso Rome) を断行するが、大衆の欲望の実現として、経済の活性化をはかる。一九二〇年から二二年の財政破綻は、収入が支出の三七%すこしという状態であり、支出額は七八億フランから一五一億七千万フランともなつていた。ムッソリーニは政権獲得後、失業者の軍隊への吸収、行政中間職の創設による雇傭増等を行つてゐる。サラリーは部長級、課長級で一九二二年の一万六三二六リラ、一万五三〇九リラが、一九二五年には二万三七二六リラ、二万一一〇一リラへと上昇してゐる。

(2) The Nazi Years, A Documentary History, ed. by Joachim Remak, Prentice-Hall, Inc., 1969, pp. 2-4, 11 & 29. 道徳倫理性への回帰は、ファシズムの特性である。しかし、それが実は素直にそこへ帰るといふことではないのが問題で、この場合、古への過ぎ去つた保守的なそれへのバックを主張しながら実は、将来のファシズムの権力、生身の激烈なその確立を目指してゐるところに問題があり、そこに倫理から権力への転換の芽がある。反資本主義、反富裕階層、そして利子奴隷から

の開放等のスローガンに、そして特に戦時利得者を民族に対する犯罪と呼ぶことに保守的な倫理、道徳感へのアピールがある。「背後から突き刺された」(stab in the back) という伝説もこのアッピールの範疇に属する。道徳、倫理の主張は、人間初期の生活—単純で、正直で健全 (less hectic) なそれへのノスタルジーとなる。これらはドイツ、イタリア、日本等において、反資本主義が農本主義の復活を現実化させようとする運動ともなる。しかしヒトラーは、ダーウィニズム (Darwinism) をひいて、適者生存の原理は道徳的にベストでなければならず、強力な道徳的原則、賢明な統治者が民族の運命をかえ得るか、と設問し、全有機世界の何千万年の歴史は、有機的進歩を遂げた種 (species) がその存在のための闘争を通じてする以外のものでなかったとし、より高貴で、美しく、道徳性に富んでいるものが、この四千八百万年の歴史を通じて常に勝利者でなかったのは、彼等が他のより強きそれらへの空間を設営してやったがためである、と喝破している。これがファシズムへの転換の理論となる。

(3) Souvenirs d'une Ambassade à Berlin, Septembre 1931—Octobre 1938, André François—Poncet, Flammarion, 1946, p. 74. ヒトラー・イデオロギーの中心は反モクラシー、権威主義政権の樹立にあるが、そのためには次の如きイデオロギー闘争を繰りひろげた。デモクラシー、議会主義、個人主義、知性主義 (Intellectualisme)、マルキンズム、共産主義、平和主義、国際主義等をヒトラーは近代の災厄 (flaux modernes) と呼んで攻撃した。これら否定的概念でヒトラー主義をみると、その実体がよく見える如くである。

(4) Les fascismes, ed. by Thierry Buron et Pascal Gauchon, Presses Universitaires de France, 1979, pp. 94-95. ヒトラーの偶像性については、次のような言説がある。即ち、ヒトラーはドイツの再生を信じる人々の希望の星である。住居、農場、蓄え、生計、労働の力を与え、人々にパンと名譽と自由を保証する。彼こそは正しきドイツを信じる人々の願望をかえる最後の切札である。絶望にあえぐ何百万ドイツ人の救世主であり、また戦場に散った二百万同胞の遺言の執行者である。ヒトラーは民衆の間から生れ、常に彼等を理解し、彼等と共に闘う、といった類のものである。 Mussolini, A Biography by Denis Mack Smith, A.A. Knopf, 1982, pp. 14-16. ムッソリーニはその運動の初期、全く大衆の欲望と渴望に副う政治を展開するものとしてのファシズム、というイメージで大衆にのぞんでいる。彼は反教会、反軍事を強調し、貧困なイタリアの税金が、教師や農業機械を買うよりも軍艦建造や買収にあてられていると非難し、大衆を無教育に放置して海外に領土の回復を求めて何になるかと喝破し、民衆の生活擁護を第一義と規定している。議会を否定し、腐敗した代議士の手で大衆の

救済は、不可能であると強調し、教会を攻撃し、僧侶は不純分子ときめつけ、資本主義の手先となつてゐると断定した。キリストとマгдаレナのマリヤ (Mary Magdalen) のラブ・アフェアというのを非難している。なお、紀要九号、二八頁—三〇頁参照。なおムッソリーニの反軍、反戦思想は衆知の如く後に一八〇度変わる。

論

- (5) The Fascist Movement in Italian Life, by Dott. Pietro Gorgolini, with Preface by S.E. Benito Mussolini, trans. by M.D. Petre, T. Fisher Urwin, 1923, pp. 5 & 43-55. 一九二三年に、ムッソリーニが政権を掌握した一九二二年一〇月末直後の彼による序文をもつて英国で出版されたこの書物は、ファッシズムの運命も終焉も知らずに書かれていただけに、その概説書として興味深いものがある(これについては、他日稿を改めて紹介したい)。ファッシズムは戦害に苦しむイタリアの世直しである、とされている。ムッソリーニはイタリア民族は、その伝統的觀念とあやまたざる判断で、政府は表裏人形のそれであつてはならず、公けの秩序を維持するため行動する勇氣とエネルギーをもつた人々からなるべきだと要求する、とされている。ファッシストは暴行と侮辱から国家と三色旗を守つた。そして生活は使命であり、義務なき権利はあり得ないと宣言することによつて、道義 (moral law) を回復したのだ。それは若きファッシスト達が学校の席を放擲して路上闘争に生命を捧げるといふ伝統的、不滅のマツチニイ教条 (Mazzinian doctrine) に基つたもの (Ubaldo Commandini) 等主張し、またその主張を自ら確信してゐる如くであつた。

- (6) Mein Kampf, Adolf Hitler, Erster Band, Eine Uebersetzung, Verlag Franz Gher Nachfolger G.m.b.h., 1934, München. 2. NO. ヒットラーが我が闘争、その他に述べたアーリア民族 (Arier Rasse) の優秀さを根幹とする民族主義はあまりに有名であつて、今更ここに喋々するまでもない程である。彼はアーリア民族という一種の仮託された民族像を描き、その純粋に近い後継者を北歐民族と規定して、その特長を細身、長頭、金髪、碧眼、白色とし、これに当てはまるものこそドイツ人であるとする。血の純潔を強調し、劣悪民族を指弾して、雑種、混血を植物、動物共に極悪とし、人間も同一カテゴリーからまぬがれないと主張してゐることはよく知られる通りである。

- (7) Dott. Pietro Gorgolini, op. cit., pp. 5, 11, 44 & 48. ムッソリーニはこの本の序文で、ファッシズムは勝利の王冠に飾られ、血にいらざられた華々しい歴史を誇ると共に、新しいその文学を創造しはじめる、と述べてゐる。マキャベリ (Machiavelli)、マツチニイ (Mazzini)、ムッソリーニは三人共、ローマ法学 (Roman Jurisprudence) とダンテ (Dante) を生んだ民族、プラトン (Plato) の比類なき政治学の三つの遺産を相続してゐるとし、法、事実、理想の三つの觀念がイタリアの最大の代表者達

がよく理解している政治学の三要素であるとしている。ナチズムは第一次世界大戦で、背後から刺し殺されたという神話によって敗戦を認めると共に、その裏切りと卑怯に復讐することをもって運動の活力の一つとするが、イタリア・ファシズムは第一次世界大戦の勝利を主張する。ビットリオ・ベネト (Vittorio Veneto) の勝利は、イタリア人が如何に耐え苦勞を重ねたかへの証言として、数千年間イタリア人の良識と記憶の中に生き続けるであろうとし、その成果が刈り取られるとき、イタリア再建が実現すると主張する。しかし、カポレット (Caporetto) の敗戦については、ファシズムもその責をうける者として、卑怯者と裏切り者を名をすことを忘れない。

- (80) Authoritarianism, Fascism, and National Populism, Gino Germani, Transaction Books, 1978, pp. 225-27. ローマ法皇庁をもつイタリアは、何時の時代、何時の政府もカソリック教問題には複雑な関係と悩みをもつ。第一次世界大戦後、カソリックの勢力は依然強く、総選挙に大きな力を振るった。カソリック連合 (Catholic Federation) は、一五〇万人の力をもっていたと言われ、一九一九年には最大政党は社会党であったが、その次にはカソリック党たる人民党 (Popular Party) が位置していた。この関係はしばらく続くが、この二大政党からはみ出した中流階級、下級階層が彼等の明確な政治表現を持たずに推移する。Through Fascism to World Power, A History of the Revolution in Italy, Ion S. Munro, Alexander Maclehose & Co., 1933, pp. 272-80. Fascism in Italy, Society and Culture, 1922-45, Allen Lane, 1972, pp. 208-38. ムッソリーニは政権掌握後、カソリックと種々の摩擦を引き起すが、ビスマーク (Otto von Bismarck) の文化大闘争 (Kulturkampf) の愚を避け、カソリックとの間に有名なラテラン和協 (Laterano accord) を締結する。その内容は次の如くであった。(一) イタリア政府はバチカン市の中立、不可侵を認め、バチカン市における法皇庁の主権を認める。(二) 若干の教会と教会財産の治外法権を認める。(三) イタリア政府は大使をバチカンに派遣し、法皇使節 (apostolico nunzio) を接受する。(四) カソリック教をイタリア国教と認め、その儀式とサクラメントの実行を保証する。(五) 結婚については、カノン法 (diritto canonico) を施行する。(六) 小、中学校においては、宗教教育を承認する。なお、ちなみにナポレオン一世は法皇ビュス七世 (Pius VII) と Concordat を一八〇一年に締結するが、これは後に破れて帝とローマ法皇との果てしなき闘争が展開する。

五 ち す び

前稿（紀要九号）ではファッシズムとボナバルチズムの關係を中心として、ファッシズムの生起、展開について考察したが、本稿においては主として大衆社会が市民社会から離れて、混沌の中にたゆたい、ファッシスト社会に変貌してゆく過程について考察した。これを人々を大衆社会の民衆として全体的にとらえ、階級もしくは階層の分化は捨象して考察を行った。全体として大衆はこの時如何なる社会経済状態の中で、如何なる社会心理に陥っているかを考え、彼等がその中から如何なる要素によって如何なる方法の下に秩序と規律と階層団 (hierarchy) を回復するかの端緒について考察を加え、少数のファッシスト徒党集団に導かれて、彼等がこの場合有している「六つの大衆社会のファッシスト心理」に訴えられて、心理的統一に導かれる過程を筆者なりに描き出した。

しかしここになお、ファッシズムの運動が、階級的なそれであり、大衆社会に働きかける階級もしくは階層政党の存在を加えたその面からの分析を決して捨象し続けることはできないことは勿論である。ファッシズム運動が、一階級の利益を主張せず全体主義をたてまゑとして運動するのは、実は、この運動が後進資本主義のはかどらない産業化を強力に推進するための運動であるからだという唯物史観的分析を行う問題もあり、またファッシストが社会を今一度働く人々の単なる集団に後がえりさせることを必要として、完成された市民社会を崩壊に導き、その要素たる客観的法体系、人間主義の理想、人権的社会的平等の原理を画餅に帰せしめるのであるという問題の考察も当然なされねばならない。更にファッシズムは経済的に破産した中産階級である商人、工人 (mechanics)、農民 (farmers) の革命的、国家主義的運動であり、ここに集産主義 (collectivism)、国際主義に反対して国家主義、アウトアルキーを

主張すると共に資本主義＝大企業 (big businesses)、社会主義＝労働組合 (big unions) にも反対し、これらにた
たかいをいどむファシスト社会の問題があるということも避けては通れない。

かくしてファシズムの分析、考察には、まだまだ問題は種々多い。しかして筆者は、これらの研究に他日を期す
ことを庶幾して、本稿では大衆社会の民衆のファシスト社会心理を分析し、ファシスト徒党集団のこれへの働き
かけをそれなりに解明し得たとしてこれに大方の御叱正を乞い上げ本稿を擲筆することとする。

